

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第258集

秩父郡皆野町

小池氏館跡

国道140号線皆野寄居バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

— II —

2000

埼玉県
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



- (上) 遺跡上空から秩父盆地を望む
(下) 心字池を中心とした庭園風景



- (上) 小池氏館跡土塁全景
(下) 小池氏館跡出土陶磁器

発刊に寄せて

21世紀の到来を目前に控え、わが国をとり巻く社会経済情勢は少子・高齢化の進行、高度情報化、地球環境問題の顕在化など大きく変化しております。

本県では、こうした変化に的確に対応し、県民一人一人が真の豊かさを実感できる「豊かな彩の国」を実現するために、「環境優先」「生活重視」の基本理念のもと、計画的な県政の運営に努めております。

中でも、道路は、県民生活や社会活動を支える最も基本的な社会基盤であります。私は知事就任以来、道路の良し悪しは地域発展のバロメーターと考え、「県内1時間道路網構想」の推進を道路整備の目標の一つに掲げ、高速道路から生活道路に至るまでの体系的な道路網の整備に努めてまいりました。

なかでも、一般国道140号皆野寄居バイパスにつきましては、周辺地域の慢性的な交通渋滞の解消を図るとともに、秩父リゾート地域へのアクセスを強化する道路として、地域の活性化に大きな役割を果たすものと期待しているところです。

秩父地方は、県内有数の観光地として知られておりますとともに、先人の足跡が多く残されている地域でもあります。かつては、和銅の献上地として名を馳せており、平成12年2月には秩父市尾田蒔丘陵で50万年前の原人の生活跡が発見されました。これは、人類史を書き替えるほどの大発見であり、私も一県民として大変誇らしく思い、早速、関係者の皆様に感謝の意を表したところです。

こうした歴史を伝える貴重な遺跡は、一般国道140号皆野寄居バイパスの建設予定地にも数カ所存在しており、「新編武蔵風土記稿」にもすでに記載があるとうかがっております。今回報告する小池氏館跡もその一つで、発掘調査の結果、館跡の一部が発見され、貴重な成果を得ることができました。

この成果をまとめた報告書が刊行の運びとなりましたので、県民文化の向上のためにご利用いただければ幸いです。

平成12年6月

埼玉県知事

土屋新彦

序

埼玉県の約三分の一ほどの面積を占める秩父地方は、いくつかの峠を越えて隣接県と通じております。その中で、山梨県に通じる雁坂峠は平成10年4月にトンネルが完成して、絶好の観光道路となりました。

雁坂峠に通じる一般国道140号線は、古来、秩父往還とも呼ばれていましたが、熊谷市を起点にして寄居町、長瀨町、皆野町、秩父市、大滝村を経て、山梨県南巨摩郡増穂町に至る主要幹線道路で、全長約150kmの長きにわたって、急峻で風光明媚な山間部を往来する観光道路でもあります。

しかし、山間部ゆえに隘路が続き、行楽シーズンには渋滞の要所としても有名であり、加えて、トンネルの開通は至便さとともに、渋滞に拍車をかけているのが現状であります。

こうした慢性的な交通渋滞の解消や、秩父リゾート地域へ通じる道路の整備、あるいはテクノグリーン構想に基づく地域振興支援のために、皆野寄居バイパスの建設が計画されました。このバイパスはトンネルを多く活用するなど周囲の環境に配慮して計画されましたが、終点の美の山トンネル付近に、数か所の埋蔵文化財包蔵地が確認されました。

これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が各関係機関と慎重に協議を重ねた結果、やむを得ず、記録保存の措置を講ずることとなり、当事業団が道路建設課の委託を受け、発掘調査を実施することとなりました。

その結果、「新編武蔵風土記稿」にも記載のある、小池氏の館跡の一部が明らかになりました。小池氏館跡から続く池を中心とした庭園は現在でも景勝地として著名であり、その池へ水を引いたと考えられる遺構が明らかにされたことは大きな成果であります。

その成果をまとめたものが、本書であります。往時の生活の一端がしのばれるとともに、本書が埋蔵文化財の保護、教育普及さらには学術研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路建設課、同皆野寄居バイパス建設事務所、さらに、皆野町教育委員会、ならびに地元関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成12年6月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野健一

例言

1. 本書は、埼玉県秩父郡皆野町に所在する小池氏船跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略称と代表地番、および発掘調査届に対する指示通知は、以下の通りである。

名称遺跡
小池氏船跡（K I K S K S）

所在地
埼玉県秩父郡皆野町大字皆野145-1他

指示通知
平成11年2月19日付け教文第2-191号
3. 発掘調査は、国道140号線皆野寄居バイパス建設工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のもと、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。
5. 発掘調査は、栗島義明・渡辺清志が担当し、平成10年12月1日から平成11年2月28日まで実施した。
6. 遺跡の基準点測量と空中測量は、株式会社朝日航洋技術センターに委託した。
7. 発掘調査における写真撮影は、栗島義明・渡辺清志が行い、遺物写真は、大屋道則が行った。
8. 整理・報告書作成作業は金子直行が担当し、平成12年4月10日～平成12年6月30日まで実施した。
9. 出土品の整理および図版の作成は、中嶋淳子の協力を得て金子が行った。
10. 本書の執筆は「1-1」を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、それ以外を金子が行った。
11. 本書の編集は、金子が担当した。
12. 本書に掲載した資料は平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
13. 本書の作成にあたり以下の機関・諸氏からご教示・ご指導を賜った。

皆野町教育委員会 菊地伸之
浅野晴樹 栗岡真理子 佐々木健策

凡例

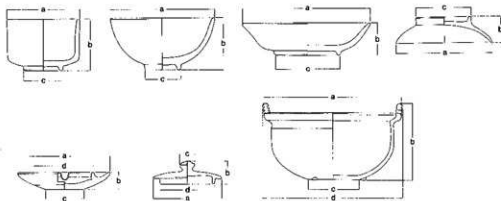
1. 本書挿図中におけるX・Yの座標数値は、国上標準平面直角座標第Ⅲ系（原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位は、すべて座標北を表す。
2. 遺跡におけるグリッドの設置は、国上標準直角座標に基づいて設置しており、10m×10mの方眼である。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向西から北へ1～、南北方向北から南へA～、と番号を付けている。
4. 挿図の縮尺は、各図版中に指示した。

地形図	1/400
	1/250
	1/100
	1/80

遺物

古銭	1/1
陶磁器	1/3
瓦質土器	1/4

5. 本書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の、1/2500、1/25000、1/50000を使用した。
6. 遺物の計測値は、以下に図示した部分の計測である。なお、遺物の分類は、「新宿区内藤町遺跡」（井波1992）の報告書に準拠した。



目次

目次

発刊に寄せて

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	14
1. 調査に至る経過	1	1. 土塁	14
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 石垣	18
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3	3. 出土遺物	18
II 遺跡の立地と環境	4	V まとめ	28
III 遺跡の概要	10		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第10図 土塁地形復元図	17
第2図 岡辺の遺跡	5	第11図 出土古銭	18
第3図 岡辺における中世の城館跡	8	第12図 出土陶磁器 (1)	19
第4図 小池氏館跡の見取り図	10	第13図 出土陶磁器 (2)	20
第5図 遺跡周辺の地形図	11	第14図 出土陶磁器 (3)	21
第6図 遺跡全体図	12	第15図 出土陶磁器 (4)	22
第7図 調査区全体図	13	第16図 出土陶磁器 (5)	23
第8図 土塁実測図	15	第17図 出土陶磁器 (6)	24
第9図 石垣実測図	16	第18図 出土陶磁器 (7)	25

図版目次

- | | | | |
|------|---------------------------|------|---------|
| 図版 1 | 土塁近景（南西コーナー付近）
土塁断面 | 図版 5 | 出土遺物（1） |
| 図版 2 | 北側土塁の石垣状積石
北側土塁 | 図版 6 | 出土遺物（2） |
| 図版 3 | 西側土塁
西側土塁の断面 | 図版 7 | 出土遺物（3） |
| 図版 4 | 土塁近景（北東コーナー近景）
調査区外の土塁 | 図版 8 | 出土遺物（4） |
| | | 図版 9 | 出土遺物（5） |
| | | 図版10 | 出土遺物（6） |

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

一般国道140号線は熊谷市を基点に寄野町、長瀬町、皆野町、秩父市、人滝村を経て山梨県南巨摩郡増穂町に至る延長約150kmの幹線道路である。

古くから秩父往還と呼ばれ秩父観音霊場巡拝の道であり、秩父地域の壺糸を熊谷方面、あるいは山梨方面へと運ぶ交通の道として利用されてきていて、平成10年4月には、それまで車両の通行が不可能だった雁坂峠に雁坂トンネルが開通し、140号線は全線開通となつて、埼玉、山梨両県の産業・文化の交流はもとより、災害復旧等においても重要な道路となった。

こうしたなか、寄野町、長瀬町、皆野町の現道は車道幅員が狭小で、一部区間が市街地を通過することや、秩父地域への主要アクセス道路がほとんど140号線に限られているため、年々所々で慢性的な交通渋滞が生じ、特に観光シーズンの休日には激しいものがある。

こうした慢性的な交通渋滞の解消や、秩父リゾート地域へのアクセス道路の強化、あるいはテクノグリーン構想に基づく地域プロジェクトの支援等のため、皆野寄野バイパスの建設が計画された。

このバイパスは寄野町木野地区を基点に皆野町皆野地区を終点とする、現道約15kmの区間をほぼ直線的に9.9kmで結ぶもので、県立長瀬玉淀自然公園内を通過することもあり、自然に配慮した設計となっており、完成後は大甲地域と秩父地域の交流が活発化され、周辺地域の活性化がより一層促進されるものと期待されている。

さて、このバイパス終点の美の山トンネル終点出口付近には数箇所の埋蔵文化財包蔵地が所在しており、その取り扱いについて、施工者である道路建設課長から平成10年1月8日付け道建第371号で、文化財保護課長あて照会があった。

これに対し、平成10年2月2日付け教文第1406-1号で、以下のように回答した。

1. 文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
小池氏館跡 (47-059)	城館跡	中世	皆野町皆野地区

2. 取り扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については、当課と別企協議してください。

その後、両課で取り扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であるという結論に達し、記録保存の発掘調査を実施することになった。

この結論を受け、発掘調査実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の二者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議し、平成10年12月1日～平成11年2月28日までの間、発掘調査を行うこととした。

埼玉県知事からは、文化財保護法第57条3の規定による埋蔵文化財発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からは同法第57条1項の規定による発掘調査が、それぞれ提出されて、発掘調査が実施された。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は平成10年12月1日から平成11年2月28日まで実施した。

12月初旬、発掘調査の準備を進め、重機による表土掘削を開始する。表土の除去に際しては、人力による周囲の立木や低木の伐採を行い、土塁などの遺構を壊さないように、最新の注意を払って行った。表土除去は、12月の中頃まで行った。

重機の表土除去が終了してから、人力で遺構確認を行い、遺物包含層の掘り下げを開始した。

基準点測量は12月の中頃に行い、遺物包含層の掘り下げと同時に、設定したグリッドで、遺物の取り上げを行った。

遺物は土塁を中心とした地域から集中して出しており、大半が近世代のものであった。

遺構確認、遺構精査は2月の初旬頃までに行い、遺構の写真撮影、測量などを含めて、2月の中旬頃までに終了させた。

2月の下旬には、調査区全体を清掃し、空中写真と空中測量を行った。

2月末には、発掘調査を全て終了し、発掘機材などを片付け、調査事務所を撤収した。

(2) 整理・報告書作成

整理作業は平成12年4月10日から平成12年6月30日まで実施した。

4月上旬から遺物の水洗・注記を行い、同時に図面・写真の整理を行った。

遺物の復元は、接合などの作業と同時進行したが、陶磁器などの薄手の遺物が多く、難航した。

復元された遺物は、順次図化を行い、トレースなどの墨入れを行った。

遺構の図面整理は、4月初旬から行ったが、空中測量図を参考にして、遺構実測図を整理した。

遺構図は4月の中旬よりトレースを行い、版組みも同時進行で行った。

4月の下旬から遺物の写真撮影を行い、5月初旬には報告書の割付けを終了させる。

原稿は、4月の中旬より執筆を開始し、5月初旬に終了させた。

報告書は、5月中旬より校正を開始し、5月末までに校正を終え、6月末日に印刷を終了して、刊行した。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成10年度）

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴 木 進

管理部

専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久 久
庶 務 課 長	金 子 隆
上 査	田 中 裕 二
主 任	長 滝 美智子
主 任	腰 塚 雄 二

調査部

調 査 部 長	谷 井 彪
調 査 部 副 部 長	水 村 孝 行
調 査 第 三 課 長	杉 崎 茂 樹
統 括 調 査 員	栗 島 義 明
主 任 調 査 員	渡 辺 清 志

(2) 整理作業（平成12年度）

理 事 長	中 野 健 一
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広 木 卓

管理部

管 理 部 副 部 長	関 野 栄 一
上 席（庶務担当）	阿 部 正 浩
上 席（施設担当）	野 中 廣 幸
主 任	菊 池 久 久
主 席（経理担当）	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
上 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二

調査部

調 査 部 長	高 橋 一 夫
資 料 副 部 長	鈴 木 敏 昭
主 席 調 査 員（資料整理担当）	磯 崎 一 一
統 括 調 査 員	金 子 直 行

II 遺跡の立地と環境

小池氏館跡は秩父鉄道皆野駅の南東方向約1キロメートルの地点にあり、鉾山の山頂からでは北西方向の標高約182メートル前後を計る皆野部に位置する。

秩父盆地を貫流する荒川は、甲武信岳・雲取山に端を発し、急峻な谷地形を形成しながら東流し、秩父盆地で流路を北に採る。その後、秩父盆地の出口付近の皆野でクランク状に屈曲するが、再び山間部を北流し、長瀬明野上下郷付近で東へと流路を変更し始め、はぐれてしまうという意味の地名が付く程の狭隘な地形を成す波久礼を貫け出で、高居地区において扇状地を形成しつつ台地部へと流下していく。

その間、大きく三段の河岸段丘を形成し、流れ込む小河川が段丘上に扇状地を作出する等、盆地地形を中心とした複雑な変化に富む自然地形を形成している。

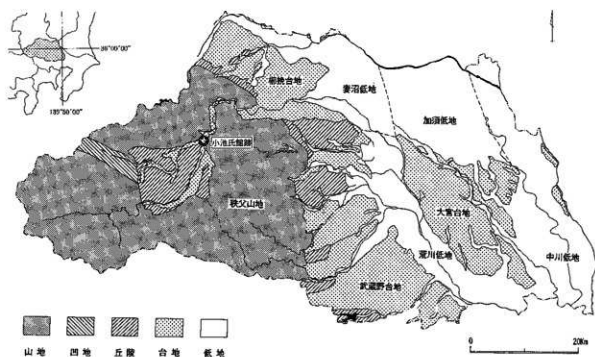
埼玉県は全体的な傾向として、西部の山間部では秩父盆地に河川が集合し、その後、荒川が小河川を斜合して大河となるが、山間部から沖積地の低地部へ移行する部分に丘陵部が発達し、河川は東西方向に流れる

のを常とする。その後、低地部にて荒川本流と出合い、河川は大きく南流するが、その間丘陵・台地部地を侵食して肥沃な沖積地を形成する。

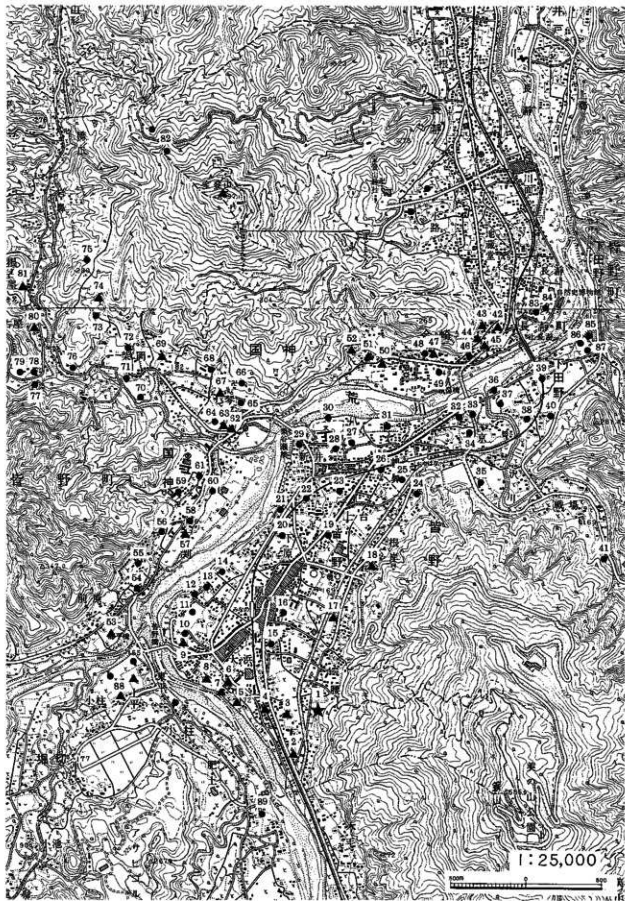
その結果、西が高く、東が低い地形を成すが、文字通り荒れ狂う荒川は何度となく流路を変え利根川と一体化したり、元荒川、古利根川、中川筋等を流れて台地を侵食したものと推測される。利根川が現在の流路を流れる以前の流路は明らかにされていないが、弥生時代以前には崩引台地の東縁を流れて荒川と合流し、現荒川筋を流れていたとする考えが一般的になりつつある。遺物に見られる関東京湾的な様相の懸崖が、考古学的な比較検討等から明らかになりつつあることから、何時の時代まで利根川が荒川筋を流れていたかは、考古学的にも大変興味を持たれる事柄である。

さて、秩父盆地は埼玉県内にあっても特異な地域であり、大きな河川が北流する唯一の地域でもある。幾つかの峠を越えて、群馬・長野・山梨・東京等の各県との往来が可能であり、秩父盆地にはそれぞれの地域

第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺の遺跡



地域	番号	遺跡名	内容	地域	番号	遺跡名	内容	
皆野町	1	小池氏館跡	中・近世	皆野町	46	梁瀬	縄文・近世	
	2	大塚古墳	古墳後期		47	天神塚古墳	古墳後期	
	3	中の芝4号墳	古墳後期		48	長興寺前	縄文・古墳・近世	
	4	中の芝古墳	古墳後期		49	金崎神社前	平安・近世	
	5	的塚古墳	遺物包蔵地		50	岩宮	古墳・近世	
	6	薬師堂下古墳	古墳		51	中丸	古墳	
	7	内手	遺物包蔵地		52	薬師堂	古墳後期	
	8	内手古墳	古墳後期		53	前原	遺物包蔵地	
	9	下和田古墳	古墳後期		54	屋敷前	縄文前～中	
	10	下和田	縄文		55	オリョウガイド	縄文中・平安	
	11	上和田	縄文		56	山の根	縄文中・古墳後期	
	12	塩旗	縄文		57	大淵古墳	古墳後期	
	13	虚空蔵Ⅰ	縄文・古墳		58	一貫目	縄文中～後・古墳	
	14	虚空蔵Ⅱ	縄文		59	上の台	縄文中期	
	15	十三塚	縄文		60	下殿	縄文中・古墳後期	
	16	柳畑	縄文		61	上殿	縄文	
	17	下中	遺物包蔵地		62	上の平古墳群	古墳後期	
	18	下根岸	遺物包蔵地		63	稲荷塚古墳	遺物包蔵地	
	19	外久保	縄文		64	上の平	縄文中・古墳～平安	
	20	下原	縄文前・古墳・奈良		65	妙見平	縄文中・古墳～平安	
	21	栗谷瀬	縄文・弥生・古墳・奈良		66	上ノ久保	縄文前期	
	22	夏内	縄文前～中・古墳～平安		67	国神塚古墳	遺物包蔵地	
	23	下小阪	縄文前～中		68	中割	縄文中・古墳後・近世	
	24	上宮沢	縄文中		69	人瀬	古墳後～平安	
	25	下宮沢	縄文・古墳		70	神平	縄文中～後期	
	26	石神井	縄文・古墳		71	下口	縄文前・中・古墳後期	
	27	小池	縄文前～中・弥生～平安		72	峰岸	縄文中・古墳	
	28	新井	縄文中～後・古墳～平安		73	朝日山	縄文早期	
	29	胸形	縄文中～晩・古墳		74	一ト屋	遺物包蔵地	
	30	大菅戸	縄文前～後・古墳・奈良		75	櫛山	縄文	
	31	親鼻	縄文前・古墳・奈良		76	宮平	縄文中～近世	
	32	辻原	縄文前・弥生・古墳後		77	中平No2	縄文中	
	33	吉丸	縄文・古墳		78	中平No3	縄文中～後期	
	34	平縄	縄文前～中・古墳		79	中平No1	縄文中期	
	35	上上京	縄文		80	根小塚Ⅱ	古墳後～中世	
	36	下土京	縄文・近世		81	根小屋Ⅰ	古墳中期	
	37	上川端	縄文・古墳前・平安		長壽町	82	三軒屋	縄文
	38	柳井戸	縄文前～中			83	上ノ台	縄文前～中・古墳後期
	39	田端	縄文前			84	上長瀬古墳群	縄文前～後・古墳後期
	40	寺の前	縄文			85	中島Ⅰ	縄文
	41	上蔵場	縄文		86	中島Ⅱ	縄文	
	42	金崎古墳群	古墳後期		87	中居	縄文	
	43	大塚2号墳	古墳後期		秩父市	88	水雨塚	古墳
	44	大塚3号墳	古墳後期			89	源坊	縄文中
	45	大塚1号墳	古墳後期					

の文化要素が各水系を通して流入している。中でも、長野県東信、山梨県塩山地域との交流は盛んで、縄文時代から近・現代に至るまでの交流関係が考古遺物や、交易史などに如実に表れている。荒川沿いの秩父盆地に至るまでの山間部では、狭い段丘面の中でもやや広い場所を占地して、縄文時代の遺跡が形成されている。荒川村の下段遺跡(金子1989)は縄文時代早期から中期にかけての遺跡で、特に、早期後半の土器には中部高地を越えた山間部東系や東海系の上器群が出土し、早期終末から前期初頭にかけては中部高地系の羽状縄文土器が出土している。何れも県内では検出例の少ないもので、峠を越えて流入したものと考えられる。また、大滝村入波沢遺跡(渡辺2000)では後期の集落が形成されており、住居跡を残した後に石を組上げた組石石棺墓が6基発見された。出土土器の中には、南東北系の土器が含まれているなど、中部高地のみならず広い地域との交流があったことを窺わせており、縄文時代の情報交流を含め、広域で複雑なコミュニケーションの実態が浮き掘りにされてきている。

秩父盆地は出口付近で赤平川が合流し、荒川、赤平川両河川に開析されて北部に吉田、中央部対角線状に尾田塚、南東部に羊山の各丘陵が形成され、その間にそれぞれ河岸段丘が発達している。

尾田塚丘陵では多摩ローム層が残存しており、約30万年から50万年前の前期旧石器の出土する遺跡が何ヶ所か発見されている。その中の小丸尻遺跡では石器のみならず、50万年前の上層や建物跡と思われる原人の生活跡が発見され、話題を提供した。

小池氏館跡が存在する皆野町は、ちょうど秩父盆地の出口の位置に当たる。赤平川と荒川の出会い部分が秩父市との市境となり、皆野町域では藁山と笠登山を避ける様に荒川が弯曲し、川面を広げるものの兩岸に山並が迫り、やや幅の広がる河岸段丘面上に多くの遺跡を載せている。

皆野町は荒川筋を中心として蝶が羽を広げた様な形を成し、地形的には荒川・赤平川沿いの皆野・国神地区、秩父山地の北東部に当たる日野河川沿いの金沢・

H野沢地区、外秩父山地に続く三沢川沿いの三沢地区に大別される。遺跡はこれらの河川の合流点近くに集中する傾向があり、標高150メートル前後の段丘上に立地する場合が多い。

秩父盆地に流れ込む河川沿いは、他地域からの流入路ともなっており、峠を越えて谷筋での往来は縄文時代の古くから主要な交易手段であった。実際、これらの比較的大きな谷筋で岩盤の安定した地域は、洞窟遺跡が多く発見されており、それらの調査によって往時の人々の生活様式や、行動範囲が明らかにされてきた。大滝村神庭洞窟(柴島1994)、秩父山橋立岩陰(芹沢1974)、浦山岩合岩陰(田部井1984)は有名な遺跡であり、縄文時代の草創期・早期を中心とした遺物が出土している。

皆野町周辺にも洞窟遺跡が多い地域で、赤平川上流部の吉田町では彦久保岩陰(小林1966)が、赤平川の支流の古田川沿いには合角川入岩陰(小林1995)が存在する。皆野町では、日野河川沿いに三角穴半洞窟(小林1966)、勝負沢岩陰(小林1988)があり、三沢川沿いには妙音寺洞穴(黒坂198)が存在する。妙音寺洞穴は早期の沈沈文期の上器群を主体としており、該期の埋葬人骨が出土している。

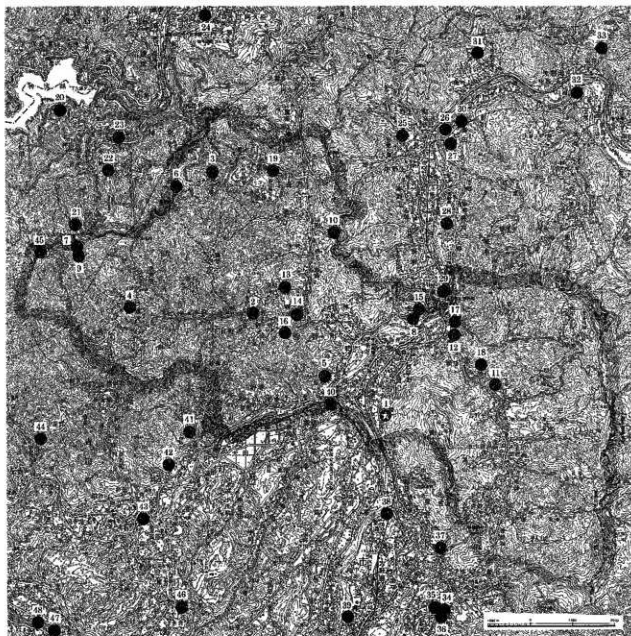
また、日野河川合流点の端川右岸に当たる段丘上には小さな川である滝の入沢川を挟んで、縄文時代中期から後期にかけての彫形遺跡(小林1981)と、大背戸遺跡(小林1988)が同時期のように並存する。両遺跡とも竪穴住居跡、敷石住居跡、組石石棺墓等が検出されており、皆野町の縄文時代中・後期の主要な遺跡となっている。

その後、皆野町における人跡は乏しく、古墳時代の後期になってから、歴史の舞台に登場する様になる。

秩父地方の占墳は、後期になってから築造されたものと考えられており、河岸段丘上に占地し、やや段丘面の広がる皆野を中心とした地域に集中する傾向がある。

荒川左岸には天神塚古墳、大塚1~3号墳から成る金崎古墳群が存在する。天神塚古墳は、現在秩父郡で

第3図 周辺における中世の城館跡



- 皆野町 1小池氏館 2阿左美氏館 3浦山城 4大手門 5大淵氏館 6金沢城山 7鐘掛城 8金崎殿館 9雨乞城 10設楽氏館 11平川氏館 12田野城 13高松城 14天神砦 15根岸山砦 16旗塚 17皆野館 18竜ヶ谷城 19若林館 神泉村 20古矢納城 21王城 22両谷城 23井戸平屋敷 24政所 長湯町 25野上氏館 26白鳥氏館 27天神山城 28井戸氏館 29藤谷淵氏館 30岩田氏館 31仲山城 寄居町 32要害山城 美里町 33門良田城 秩父市 34山田館 35遠山館 36大島館 37長尾城 38諏訪城 39宮崎城 40小桂塚の内 吉田町 41竜ヶ谷城 42寺山 43秩父氏館 44比丘尼城 45石間城 小鹿野町 46奈倉館 47小鹿野氏館 48御陣屋

番古く位置付けられている古墳である。また、荒川右岸の、小池氏館跡の南西方向にあたる糞山山麓には、大塚古墳や、中の芝古墳、内手古墳群などが存在し「十三塚」の呼称も残っている。大塚古墳は「新編武蔵風土記稿」に、「水ノ雨塚」として、開口した石屋内部の様子についての記載がある。

菅野伊豆における古墳時代後期の遺跡は、大背戸遺跡や吉丸遺跡で住居跡や祭祀関係の遺物が発見されているが、調査事例は少ない。また、奈良・平安時代についても同様で、大背戸遺跡や下原遺跡(菊地1995)で住居跡が検出されている他、調査事例に乏しく、今後の調査が期待されるところである。

しかし、平安時代末からの武士団の成立によって、秩父地方は一転して歴史の中心舞台となってくる。

律令制の衰退のもとで班田建定制が解体し、荘園の増大が図られて来ると、中央から派遣された国司達は任期終了後、在地の有力者と血縁関係を持つなどして土着化し、荘園を背景とした富と武力をもとに上豪として成長していった。

平頼門の乱等を契機として治安が乱れて来ると、各地で武士団が形成されるようになってくる。埼玉県でも秩父氏、足立氏、比企氏をはじめ、武蔵七党などの中小武士団が台頭してきた。坂東八平氏の一つである秩父氏からは畠山氏や河越氏が出ており、鎌倉幕府の成立に尽力している。

また、武蔵七党に属する丹党は、秩父地方を本拠地とし、中村氏を中心として、横瀬・薄氏や小籠野・大河原氏等を輩出している。これ等の武士団の居館は、明らかにされていないが地名とともに伝承として残っている場合が多い。典型的には、山麓や、台地縁辺のH当たりが良く、水利に恵まれた所に方形の居館を構えることが多い。

これに比べて、秩父郡市の城館跡は山城群を特徴とする。これ等の山城群は、後北条進出後の北条氏邦の秩父支配が確立した後、甲斐の武田氏に対する秩父地

方警護のため築城されたものが多い。

鎌倉幕府の成立以後、南北朝の動乱を経て、戦国時代に入ると、小田原に本拠を置く北条氏が武蔵に進出して来る。その間、古河公方足利氏成と山内・扇谷両上杉は五十子の戦い等で争っていたが、山内上杉家では家老職の家督問題から、長尾景春が主君に背き文明8年(1476)に寄居の鉢形城に入った。しかし、扇谷上杉の配下である太田道灌に攻め落とされ、荒川村H野城に逃げ落ちている。

その後、山内と扇谷の上杉は不忠と争い始めるが、そこに北条氏が武蔵に進出して来る。北条氏は明応4年(1495)に小田原城、大永4年(1524)に江戸城を落とし、天文14年(1545)の河越夜戦を征して武蔵の上杉氏を一掃して、秩父地方までを配下に置いた。秩父地方では武蔵七党の猪俣党の系統である藤田氏が、いち早く後北条方に付いており、藤田康邦は嫡婿として北条氏邦を迎え入れ、鉢形城主とした。また同時に、甲斐の武田氏への防衛として秩父道には大神山城・高松城、志賀原峠道には日尾城、雁坂峠道には熊倉城、止方峠道には根占谷城、定輪峠道には竜ヶ谷城、他に要害山城、花園城、用土城、円良田城等を鉢形城の支城として、この時期に整備したものと考えられる。

その後、永禄4年(1561)に越後の上杉謙信が秩父に攻め込み日尾城、天神山城を落とし、武田氏は永禄5年(1562)以降数回にわたって武蔵に攻め込んでいるが、永禄12年(1569)には武田信玄が鉢形城まで攻め寄せている。秩父地域の山城は、天正18年(1590)の豊臣秀吉の関東進出以降、鉢形城の落城とともに全て廃城となっていく。

本館跡の住人である小池氏は、この北条氏邦に仕えていたことが「新編武蔵風土記稿」に記されており、山城としてではなく、糞山の山麓に佇む居館としての庭園の見事さも特記されている。小池氏は戦国時代終末から、近世にかけて栄えた武士であることが窺える。

Ⅲ 遺跡の概要

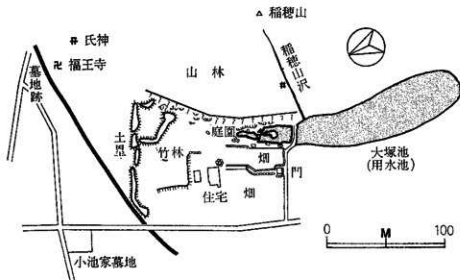
小池氏館跡は、秩父郡皆野町大字皆野145-1番地に所在する。背後に眞山が聳え、荒川の河岸段丘との境に当たる裾野部分に館跡は構築されている。皆野駅からは南東方向に約1キロメートル程、荒川河床まで200メートル程の地点に位置する。調査区内の標高は、最も高いところで約184メートル前後、低いところで約181メートル前後を測る。西から南西方向に緩く傾斜する斜面に、館跡の一部が構築されている。

館跡は文政11年（1811）に編纂された旧武蔵州の地誌である「新編武蔵風土記稿」に庭園の記載がある。また、門の一部が残されているが、庭園の北東方向の山裾に当たる竹林中に、方形に巡らされた土塁が現存している。

今回、発掘調査の対象となった部分は、この土塁の北西部分と、それから続く堀部分であった。土塁は調査区内で全長約45メートルほどを測り、遺存状況の良好な部分では基底部の幅が約7メートル、頂部は崩落が見られ、なだらかな馬の背状を呈しており、およそ15～2メートルの幅を有している。

土塁の平面形状は、南東部の未調査部分を入れると、東西方向に長軸を採る土塁の四隅が丸くなる長方形で、長軸約30メートル、短軸約25メートルを測る。

第4図 小池氏館跡の見取り図（皆野町誌より転載）



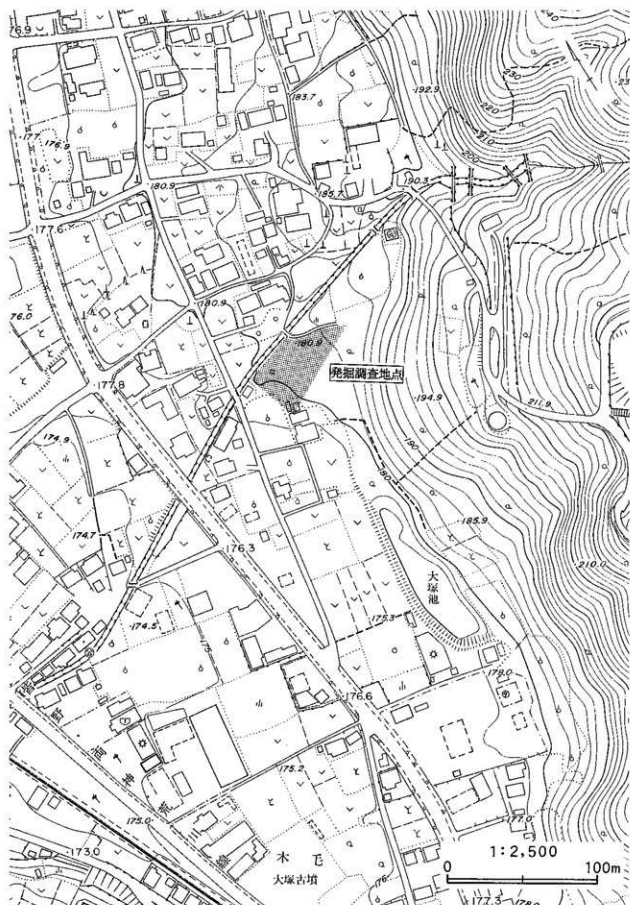
土塁には粗密はあるものの、石垣風に角礫が葺かれており、部分的には大形の根石風の石基礎にして、密に礫が積まれていた状態が観察された。

土塁内部は中央部が窪み鉢状に窪んでおり、最も低い部分と、土塁の頂部との比高差は約2メートル程であった。土塁構築面および内部の堆積土は、多量の有機物を含んだ腐植土が厚く堆積しており、建設当時この地が埴間の環境にあったことを窺わせている。

調査区外となるが、土塁の南東の角部分に縦横5メートル程の張り出しを持っており、他の部分より0.5メートル程低く作り出されている。この張り出しから南方向にかけての山裾部分は小さな谷状の地形が形成されており、この方向の延長上約35メートル程で、庭園内の池に到達する。この池は、現在堰き止められているが、すぐ南側に南北方向に細長い筋子状を呈した大塚池が存在している。大塚池は、稲穂山からの給水を得ているが、往時は庭園の池と一体化していたものと思われる。

土塁からこの池に至るまで、山肌は巨岩等露出し、庭園に見合う細工が施されている等、この池を中心とした庭園は、まさしく「郡中第一の庭」と言わしめたる程の優雅さを兼ね備えている。

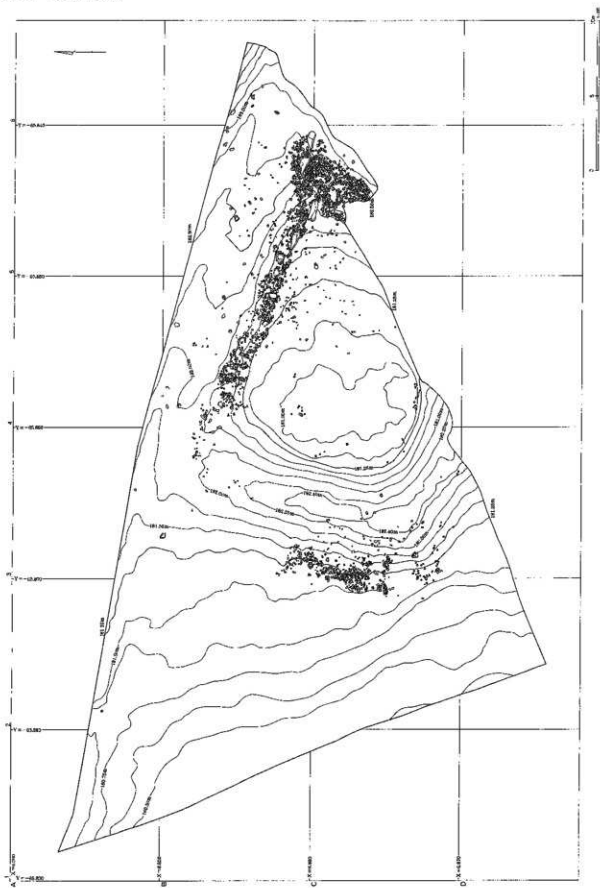
第5図 遺跡周辺の地形図



第6図 遺跡全体図



第7図 調査区全体図



IV 遺構と遺物

1. 土塁

土塁は全体の3分の2程を調査した。土塁は長軸方向を東西方向に採り、南北に短軸方向が設定されている。土塁の長軸方向は、麓山から続く山裾の傾斜方向とほぼ同じ方向を示し、地山の傾斜に対して安定する様配慮が成されているものと思われる。

土塁はほぼ全周は現存しており、調査区外に一部当たるものの、その全形を知ることができる。

土塁の平面形状は、隅の丸い長方形を呈しており、調査区外に当たる南東コーナーに、縦横5メートル程の張り出し部分を持ち、この部分が周辺の土塁より約0.5メートル程低く構築されている。

土塁はA-3区~D-3区からB-5区~D-5区にかけて存在し、北側の長軸土塁はA-3区からB-5区にかけて約30メートルの長さで存在し、西側の短軸土塁はA-3区からC-2区にかけてほぼ完全な形で現存し、長さ約25メートルを測る。

南側の長軸土塁と東側の短軸土塁は、調査区外ではあるが、D-5区で接合し、この南東コーナーに張り出しを持っている。したがって、やや北北西に軸が振れているが、東西方向に長軸を持ち、長軸30メートル、短軸25メートルの長方形で、南東コーナーに約5メートル四方の張り出しを持つ土塁であることが確認された。

土塁は、基底部が最も広いところで約7メートルを測り、頂部は崩落とともに緩い馬の背状を呈しており、およそ1.5から2メートルの幅を持っている。また、土塁の高さは、内側の最も低い部分から約2メートルの比高を測る。

土塁内部は掘り鉢状の窪み状態を呈しているが、精査の結果、柱穴や土壇等の付属施設は検出されなかった。また、土塁内部は、土塁外部よりやや低く造成されていた。

土塁内部の覆土は、枯葉等の腐植土が厚く堆積し、

この腐植土とともに、上に近世を中心とした中・近世の遺物が出土した。

土塁の構築面は、多量の有機物を含んだ黒色の混土礫層であり、構築当時は周辺が湿潤な状況であったことを物語っている。土塁の構築土は地山を掘り返したものを積み上げており、層序は次の様であった。
<自然堆積土(地山)>

I層 明褐色砂礫層。礫および小礫、砂を主体とする層で、粘性に乏しい。

II層 砂礫層。

III層 黒褐色粘土層。片岩の小礫を多量に含み、粘性強く、しまりが強い。

<土塁構築土>

1層 黒褐色土層。表土。

2層 褐色土層。小礫、砂を多く含み、粘性乏しい。

3層 明褐色土層。小礫および砂を多く含む。

4層 褐色土層。礫、小礫、砂を多く含み、黒色土を少量含む。やや粘性あり。

5層 黒色土層。礫、小礫を少量含む。

6層 茶褐色土層。小礫を多量に含む。

7層 茶褐色砂礫層。礫、小礫を多量に含み、粘性、しまりに欠ける。

8層 暗褐色土層。礫を少量、小礫を多く含み、炭化物も多く含む。やや粘性あり。

9層 暗黒褐色土層。砂と小礫を混えた暗黒褐色土。

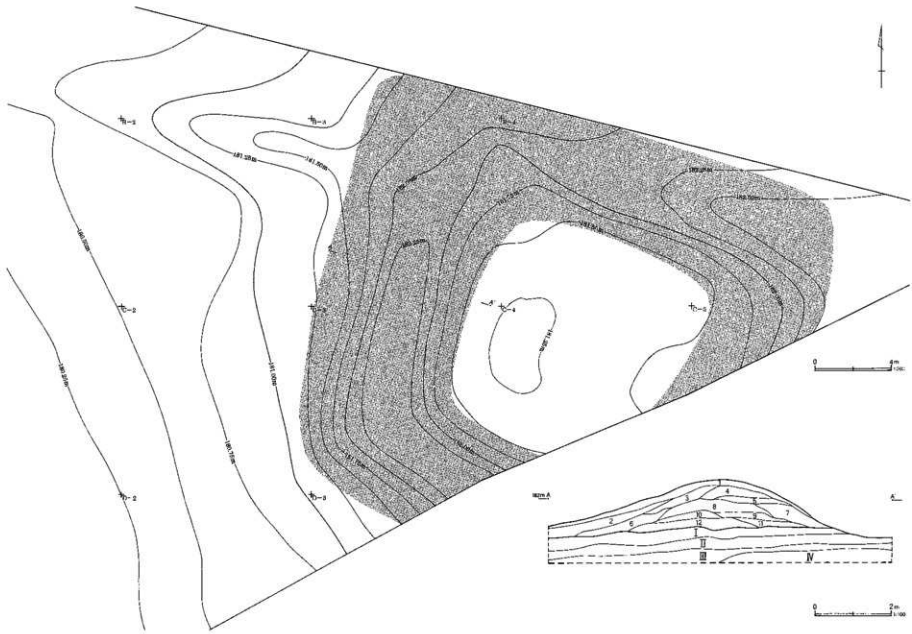
10層 褐色土層。砂と小礫を混えた褐色土で、粘性があるが、しまりに欠ける。

11層 暗褐色土層。砂と小礫を混えた暗褐色土で、炭化物を少量含み、粘性がある。

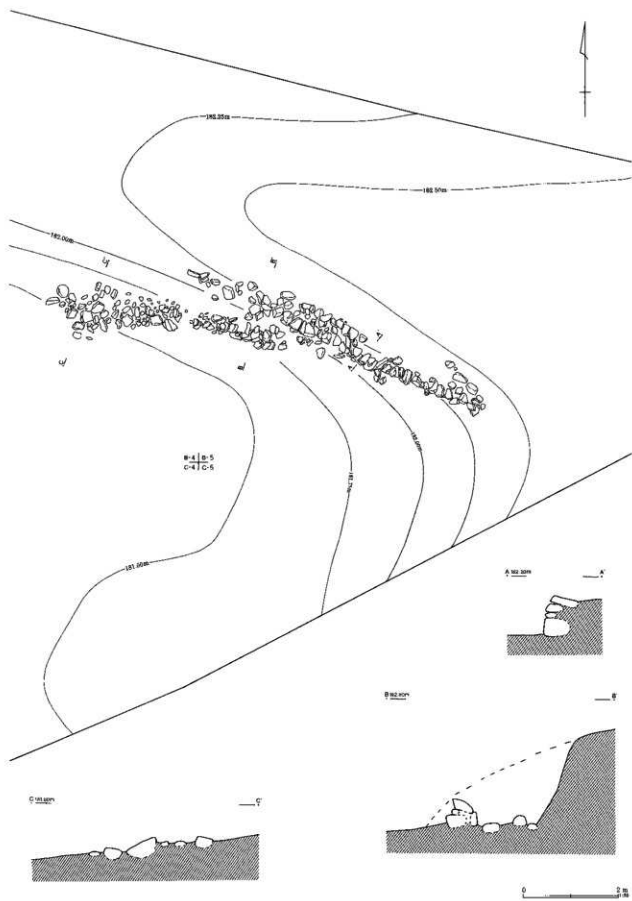
12層 暗褐色土層。砂と小礫を混えた暗褐色土で、炭化物を多く含む。

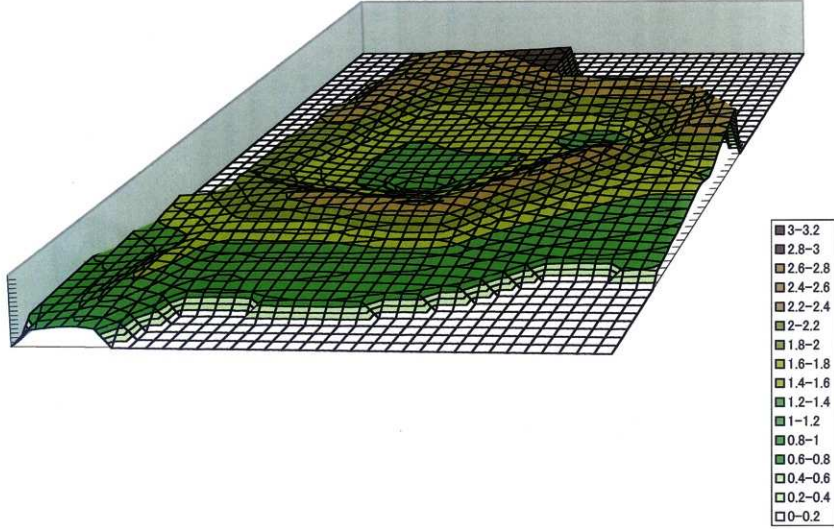
土塁は、構築時期が同一時期と思われ、やや礫の多い土と、粘性の強い土等を幾重にも交互に積み重ねており、何れもそれぞれ地山の土を使用している様子が窺われた。

第8图 土壤剖面图



第9图 石垣实测图





2. 石垣

上塁には、その斜面に対して葺き石状に、石垣が構築されていた部分があった。石垣といっても、十塁の全面に確認されたわけではなく、部分的に確認されており、土塁の表面を覆う様に石が敷き詰められているものである(第7図)。

しかし、部分的には大きな岩を根石状に組み、その上に組み石を施し、石垣の呈を成すところもある。

石垣は、北側の土塁部分に顕著にみられた。北側上塁のB-4区からB-5区にかけて、特にB-5区に寄った部分に良く現存しており、十塁全体に大きな石を根石として、石垣が組まれている。第7図は石組み検出面での実測図で、石組み以外の流れている石等も図化

されている。

この北側の十塁にみられる浮き石等はずした状態が第9図であり、断面図に見られるように、大きな礫を基部にし、比較的扁平な礫を積み上げている。礫は大半が凝結片岩の様な、片岩質のものが多かった。

また、東側の土塁では北側の土塁との交点部分で、十塁頂部から裾野部にかけて、比較的密に石が組まれていた。西側の十塁は、B-3区付近では殆ど石垣が検出されなかったが、C-3区付近から遺存状況が良くなり、C-4区では土塁の裾野部分にかけて組み石の遺存状況がよくなっている。また、南側の上塁では、石垣は殆ど検出されなかった。

3. 出土遺物

古銭(第11図1、2)

上塁内部の覆土中より、古銭が2枚出土した。いずれも北米銭である。

1は3分の1程を欠損するが、「天祐通寶」と確認でき、初鑄が1017年である。

2は腐食が著しいが、「嘉祐元寶」と確認でき、初鑄が1056年である。

小池氏館跡で確認できる中世としての可能性のある遺物であるが、近世代に集められた可能性もある。

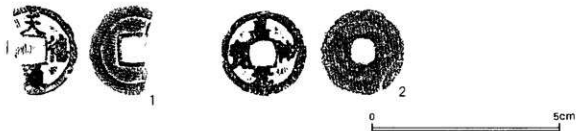
陶磁器(第12図～第18図)

図化した陶磁器は、全て近世の所産と思われる。遺跡全体からは、近代の陶磁器も出土しているが、近世のものを抽出して示した。なお、法量等は表にしてま

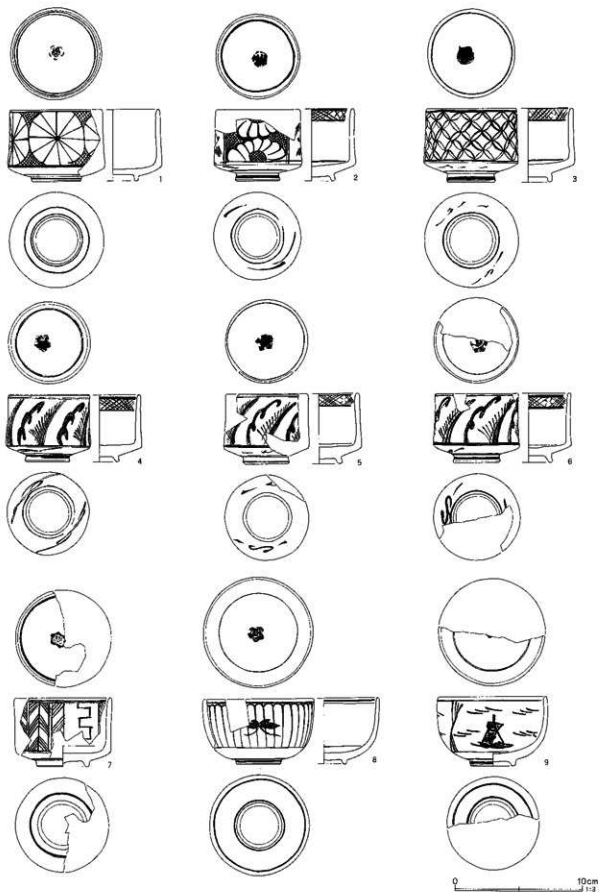
とめたが、産地等は推測のことが多い。

1～25、28～37は碗である。1～7は半球形の小碗で、肥前系の磁器である。8～11は半球形の小碗で、肥前系の磁器である。12、13は筒丸形の小碗、14、15は端反系の中碗で、それぞれ瀬戸系の磁器である。16、17は丸形の中碗で、肥前系である。18～20は杉形の小碗で、信楽系の陶器である。21は半球形の中碗で、瀬戸・美濃系の陶器である。22、23は端反形の中碗で、瀬戸・美濃系の陶器である。24は瀬戸・美濃系の鉄軸系陶器小碗である。25は中碗で、肥前系の磁器である。28、29は丸形の中碗で、肥前系の磁器である。30、31は広東形の中碗で、瀬戸・美濃系の陶器である。32～37は広東形の中碗で、肥前系の磁器である。

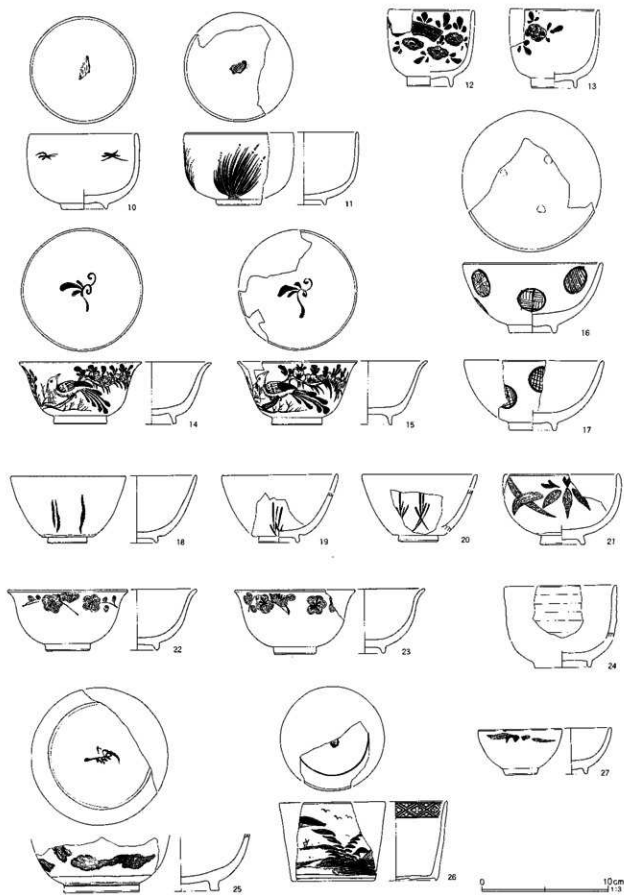
第11図 出土古銭

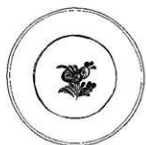


第12图 出土陶磁器 (1)



第13圖 出土陶磁器(2)

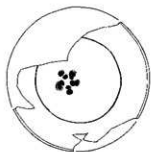




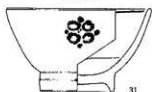
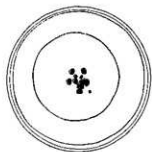
28



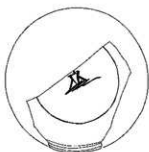
29



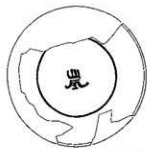
30



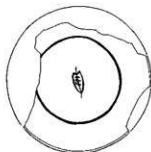
31



32



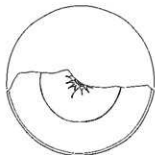
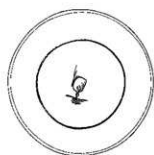
33



34

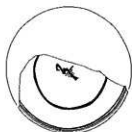


第15图 出土陶磁器 (4)



35

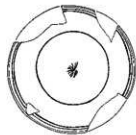
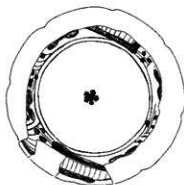
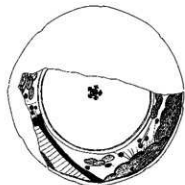
36



37

38

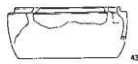
39



40

41

42



43

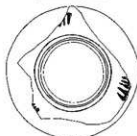




44



45



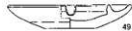
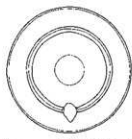
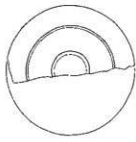
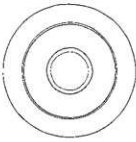
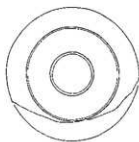
46



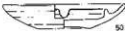
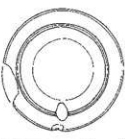
47



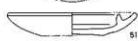
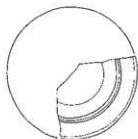
48



49



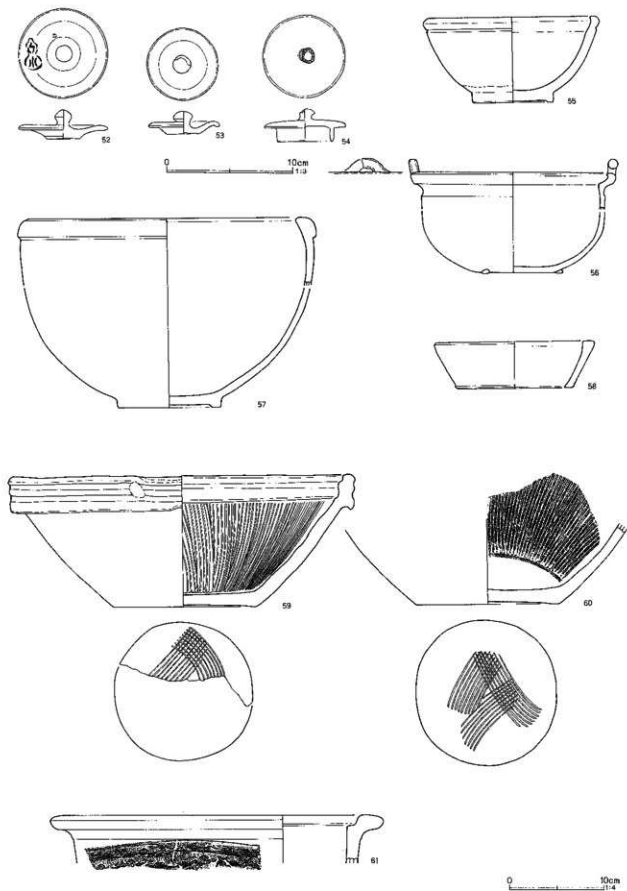
50



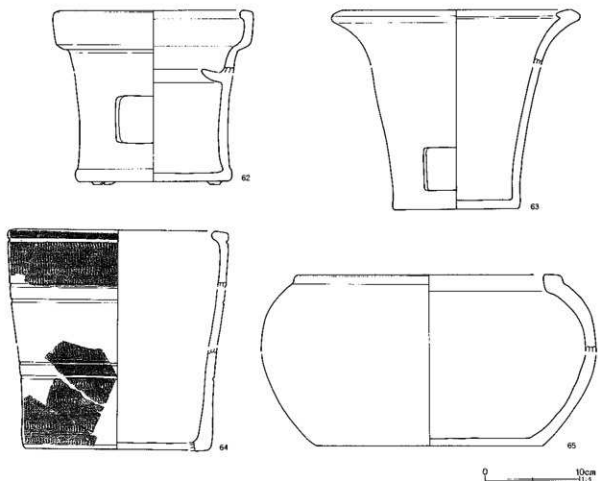
51



第17回 出土陶磁器 (6)



第18図 出土陶磁器 (7)



26は桶形のそば猪口で、肥前系の磁器である。
 27は丸形の小杯で、肥前系の磁器である。
 38、39は肥前系磁器の中碗である。
 40、41は楕円形・輪花の五寸皿で、波佐見・平戸系の磁器である。
 42は青磁の香がで、一部が現存する。
 43は口縁蓋受けの合子で、口縁部が約半分現存する。
 44～48は丸形の小皿で、肥前系の磁器である。
 49～51は油筒切立状の灯明皿で、瀬戸・美濃系の陶器である。
 52、53は急須の蓋、54は土瓶の蓋で、いずれも陶器

である。

55、57は練鉢、59、60は堺・明石系の掃り鉢である。

56は土鍋、58は七厘五徳、61は火鉢、62、63は七厘、64、65は火入と思われる。

以上、出土陶磁器は観察表に見る如く、18世紀の後半代を推定できるものも存在するが、瀬戸の磁器が存在することなどを考慮すると、大半が19世紀を前後する時期に位置付けられ、継続的な使用も当然の如く考慮されるが、消費地としての大半の遺物の使用年代が19世紀の初葉であることが推測される。

番号	材質	器種	法 量 (cm)				形 状	文 様		産 地	備 考
			a	b	c	d		外 酒	内 酒		
1	磁器	小碗	7.3	5.6	3.9		半筒形	菊花散し	見込五弁花	肥前系	1750～
2	磁器	小碗	(6.7)	5.7	3.6		半筒形	菊花紫ぎ	見込五弁花 四方榫	肥前系	1750～
3	磁器	小碗	7.1	5.8	3.5		半筒形	七宝紫ぎ	見込五弁花 四方榫	肥前系	1750～
4	磁器	小碗	6.4	5.2	3.5		半筒形		見込五弁花 四方榫	肥前系	1750～
5	磁器	小碗	(6.6)	5.5	3.7		半筒形		見込五弁花 四方榫	肥前系	1750～
6	磁器	小碗	(6.6)	5.4	3.7		半筒形		見込五弁花 四方榫	肥前系	1750～
7	磁器	小碗	(7.7)	5.4	4.1		半筒形	矢羽織・ 縦櫛南	見込五弁花	肥前系	1750～
8	磁器	小碗	8.8	5.2	3.5		半球形	櫛	見込五弁花	肥前系	
9	磁器	小碗	(8.6)	5.5	3.5		半球形	帆掛舟・水		肥前系	
10	磁器	小碗	8.6	5.9	3.7		半球形	鳥		肥前系	
11	磁器	小碗	8.6	5.7	3.5		半球形	稲束		肥前系	1780～
12	磁器	小碗	(6.8)	6.0	3.7		筒丸形	草花(橘)		瀬戸	1800～ 染付が盛泡
13	磁器	小碗	(7.1)	6.2	3.6		筒丸形	草花(橘)		瀬戸	1800～ 染付が盛泡
14	磁器	中碗	9.7	4.9	4.2		端反形	桐樹・ 鳥(鳳凰)	蔓草	瀬戸	1800～ 染付が盛泡
15	磁器	中碗	9.5	5.0	4.0		端反形	桐樹・ 鳥(鳳凰)	蔓草	瀬戸	1800～ 染付が盛泡
16	磁器	中碗	(11.1)	5.5	3.8		丸形	丸文散し		肥前系	見込に三足 ハマ、浴着 痕あり
17	磁器	中碗	(11.1)	5.5	3.8		丸形	丸文散し		肥前系	見込に三足 ハマ、浴着 痕あり
18	陶器	小碗	9.1	5.3	3.1		杉形	木賊		信楽系	1740～ 高台無軸
19	陶器	小碗	(9.2)	3.9	3.2		杉形	若松		信楽系	1740～ 高台無軸
20	陶器	小碗		3.5			杉形	若松		信楽系	1740～
21	陶器	中碗	(9.2)	5.5	3.5		半球形	もみじ・笹		瀬戸・美濃	1800～ 高台無軸 色絵(赤)
22	陶器	中碗	9.5	4.8	3.5		端反形	草花(梅)		瀬戸・美濃	1800～
23	陶器	中碗	(9.5)	5.1	3.3		端反形	草花(梅)		瀬戸・美濃	1800～
24	陶器	小碗	(8.8)	4.1			輪切形?			瀬戸・美濃	1750～
25	磁器	中碗		4.3	6.0			紫紫ぎ?	見込 寿	肥前系	
26	磁器	そば猪口	(8.4)	6.2	(6.6)		桶形 蛇の口門 形高台	山水 (海浜風景)	四方榫	肥前系	1750～
27	磁器	小坏	6.6	3.6	2.6		丸形	笹		肥前系	
28	磁器	中碗	10.8	5.4	(4.4)		丸形	草花・苧蓄・ 竹	見込 草花 四方榫	肥前系	
29	磁器	中碗	10.3	6.5	4.6		丸形	草花(海草)		肥前系	
30	陶器	中碗	11.3	6.4	5.5		広東形	草花 または宝	見込 草花	瀬戸・美濃	1800～
31	陶器	中碗	11.4	6.5	5.8		広東形	草花 または宝	見込 草花	瀬戸・美濃	
32	磁器	中碗	(11.3)	6.1	6.5		広東形	草花(櫻子花)	見込 帆掛舟	肥前系	
33	磁器	中碗	(11.1)	6.1	5.9		広東形	市松網子・ 網格子	見込 文字	肥前系	
34	磁器	中碗	(11.5)	6.5	5.8		広東形	草花	見込 雲	肥前系	
35	磁器	中碗	11.5	6.8	6.6		広東形	稲束	見込 雲	肥前系	
36	磁器	中碗	(11.8)	6.9	6.5		広東形	山水 (海浜風景)	見込 花または 見込 太陽	肥前系	

番号	材質	器種	法 寸 (cm)				形 状	文 様		産 地	備 考
			a	b	c	d		外 面	内 面		
37	磁器	中碗	(9.7)	5.0	5.5		広東形	風雲	見込 扇し寿	肥前系	
38	磁器	中碗蓋	(9.5)	2.3	3.7		丸形	鶴		肥前系	
39	磁器	中碗蓋	10.2	2.7	5.9		丸形	折枝松	松雲	肥前系	
40	磁器	五寸皿	(14.2)	4.5	8.3		猫反形 輪花 (8)	唐草(海雲印) 扇し角福	草花 見込 五弁花	波佐見・平 戸系	1720~
41	磁器	五寸皿	(14.0)	4.5	8.1		丸形(底広) 輪花 (8)	唐草(海雲印) 扇し角福	草花 見込 五弁花	波佐見・平 戸系	1720~
42	磁器	香炉	(9.6)	4.6							
43	磁器	谷子	(8.1)	2.3			口縁巻受				
44	磁器	小皿	10.3	2.7	5.1		丸形(底狭)	笹	帯莖蒲	肥前系	
45	磁器	小皿	(10.3)	2.8	(5.2)		丸形(底狭)	笹	帯莖蒲	肥前系	
46	磁器	小皿	10.6	2.2	7.5		丸形(底広) 蛇の目 凹形高台	唐草(菊鶴印)	控牡丹・丸文 見込 三方割銀 舎		高台一部無 軸
47	磁器	小皿	10.5	2.1	7.7		丸形(底広) 蛇の目 凹形高台	唐草(菊鶴印)	控牡丹・丸文 見込 三方割銀 舎		高台一部無 軸
48	磁器	小皿	(10.1)	2.3	(7.1)		丸形(底広) 蛇の目 凹形高台	唐草(菊鶴印)	控牡丹・丸文 見込 三方割銀 舎		
49	陶器	灯明受皿	9.8	1.8	4.1	6.4	油溝切立状			瀬戸・美濃 系	1670~ 底部外面無 軸
50	陶器	灯明受皿	9.8	1.9	4.1	6.8	油溝切立状			瀬戸・美濃 系	1670~ 外面軸まだ ら
51	陶器	灯明受皿	(10.3)	1.8	(4.9)	(7.6)				瀬戸・美濃 系	1670~ 外面軸まだ ら
52	陶器	急須蓋	7.0	2.3	1.3	2.7		瓢箪			
53	陶器	急須蓋	5.6	1.8	1.4	2.4					
54	陶器	土瓶蓋	6.4	2.5	1.1	4.2					
55		鉢鉢	18.7	9.0	8.6		口縁玉縁系			瀬戸・美濃 系	1800~ 底部外面無 軸
56		土鍋	31.7	20.1	11.0		(丸形三足 紐状取耳)				江口近郊?
57		鉢鉢	21.8	12.0	8.1	22.2	把手無し				
58		七厘五徳	(12.5)	4.9	(16.9)						土師質
59		撰鉢	(36.8)	13.8	(14.8)		口縁外帯 二段			堺・明石系	1800~ 内面唇目 見込に日跡
60		撰鉢		8.4	15.0					堺・明石系	内面唇目
61		火鉢	(35.4)	5.0				墨押文様			
62		七厘	(21.2)	6.4							
63		七厘	(26.4)	5.6							
64		火入れ	(23.4)	(23.0)	(20.0)			墨押文様 (履筋)			瓦質
65		火入れ	(28.2)	8.1							土師質内外 面スス付着

V まとめ

今回の小池氏館跡の調査では、調査面積が狭かったものの、調査区内の土塁のほぼ全容が把握可能であったことなど、多くの成果を得ることができた。

発掘の成果を要約し、その内容を若干検討して、まとめたい。

調査の所見から、土塁は長辺約30メートル、短辺約25メートルの東西方向に細長い長方形で、比高約2メートル程を測るものであった。調査区外に当たる南東コーナー部分には、約5メートル四方の張り出しをもっており、この部分が周囲より0.5メートル程低く作り出されている。

土塁には石垣状の崩し石を施しており、特に東側の土塁で、南東コーナーの張り出し部分方向に向かって、周辺の石を素材とした石垣が丁重に施されている様子が窺えた。

土塁内部にはピット等の付属施設は発見されなかった。また、土塁内側は腐植土等が厚く堆積し、土塁基底部よりやや深い帯り斜状を呈していた。

以上の成果を総合すると、この土塁の内部に館等の居住施設が建設されるには、良い条件が整っているとは言えない部分が多い。

また、土塁南東コーナーに一段低い平場状の張り出しを持っており、この張り出しから山裾に沿って浅い谷状の痕跡があり、この谷が庭園内の池方向へと続いている。この谷と池が連結していたかは、未調査のため明確に示せないが、関連性の強いものと判断される。

さらに、近隣の古老の話によれば、人正時代頃までは土塁内の窪地に水が溜まっており、水車小屋が存在していたと言う。

土塁内部及びその周辺から、18世紀の後葉から19世紀前葉の陶磁器が出土しており、少なくとも18世紀後葉の段階で土塁は存在しており、諸条件から土塁内に水が溜められ、南東コーナーのテラスから続く谷を通して池へ水が供給されていたものと推測される。従って、土塁内は野水池となり、続く谷は導水路の役

割を果たしていたものと判断されるのである。

発掘結果からは、土塁の構築年代が推定できなかったが、遺物から少なくとも18世紀には土塁が存在していたことは明らかで、その用途も推測可能となった。

しかし、小池氏がこの地に移ってきたとされる戦国時代終末に、この土塁が存在していたかどうかは、依然として不明なままであるが、文政11年(1811)に編纂された「新編武蔵風土記稿」の記載と、出土遺物の年代が整合性を持つことから、池を中心とした庭園が18世紀の終末には完成して、その美しさが秩父郡内に知れ渡っていたことは事実である。池に関しては、慶長年間に掘られたという記載がある。

さて、小池氏の由来については、先の「新編武蔵風土記稿」の記載と、小池家の霊碑(位牌)から知ることができる。やや長くなるが「新編武蔵風土記稿」を抜粋すると、「舊家者甲正市郎右衛門 氏を小池とす、先祖小池左馬助は慶長の頃の人、其父を彌八郎と云、其父左馬助は北條氏邦に仕へ、十六歳の時勅氣をうけ死を賜ひければ、彌八郎を甲州より迎て養子とせしより、此所に居住すと云、慶長年時に撃ちし池とて、園中に百間許りの泉水あり、宅の正面に武甲山兀立して、雲より突に及びて、箕山打續きて櫓外に連り、岩石の間より飛泉そそぎ、或いは寛なども水を引て池にそそげり、池に臨める古松、砌に峙てる奇石いと景趣ありて其詠殊に好し、上人罷して郡中第一の庭と云て、かなたこなたよりも遊覽せるもの多く來ると云、池中の岩上に小庵ありて辨天を安ず、甲州より住持持參せしものなりと云、長五寸許の木坐像なり、同人家へ先祖左馬助が、大阪御陣の節御供せし時、武具片古文書二通を傳來せり。」という記述がある。

また、霊碑については「哲野町誌」で詳しい分析が成されている。それを参考にして、「新編武蔵風土記稿」を合わせて解釈すると、小池氏の先祖は代々鎌倉北条氏に仕えていたが、北条高時が没落した後、応永3年(1423)に哲野の人塚に移り住んで来たという。

霊碑には初代から20代までの系歴と事跡が記されているが、9代までの系歴については記されており、実質的には12代目か小池氏の始祖と考えられている。

霊碑によれば、10代目の左馬之助光里は天文年間(1532~1554)に、武蔵七党の猪俣党の系統である藤田康邦に仕え、11代目の左馬之助光里は康邦の娘婿である北条氏邦に仕えたが、遺命によって殺されてしまう。12代目の弥八郎寛倫は浜光の娘婿として甲州より迎えられ、菅野の大塚に住みついたと考えられており、この12代目が実質の始祖と云われている。

弥八郎寛倫は、武田家の甲州巨摩郡山岳地帯の家臣団の一つである津金衆の一族であり、武田の系統を引いている。この弥八郎を始祖とする小池氏の系統が、藤田氏を介して後北条側に組み込んでいることは、政治的な背景が垣間見られ、秩父地域における後北条の対武田や上杉への戦略の一つとしての要素が窺われるとともに、戦国時代終末において秩父地域における後北条支配の一色化が完成されていなかったとする指摘がある様に、秩父地域の戦国時代終末における地獄的な政治支配の複雑さを示しているものと推察される。

その後、豊平軍によって鉢形城が陥落した後、弥八郎の子13代目左馬之助宗算は、慶長3年(1598)の検地の際に村民となって、名主役を勤めている。また、「新編武蔵風土記稿」に記載のある大坂冬の陣(1614)、夏の陣(1615)に参加したのは、14代目の五衛門充福と考えられている。

霊碑によれば、13代目の左馬之助宗算の時、池を掘って中之島を築いているが、その後も16代目の市郎右衛門勝家が寛文年間(1661~1672)に、20代目の市郎右衛門教益が寛政3年(1791)に青石を取り除く等して池を掘り直しており、少なくとも二回に渡って大きな改修が行なわれ、徐々に池を中心とした趣のある庭園が築かれてきたものと思われる。

近世初頭期に、秩父地方でこのような立派な中世様式の庭園を何故建設できたかについては、「菅野阿誌」でも指摘されているが小池氏が、大坂冬・夏の陣に参加していたことを大きな要因の一つとして挙げるこ

とが可能であろう。その際、都の造園技術者や文化人等との接触があり、それ等の招来によって庭園が築かれたと考えられる。言うまでもなく、財政的な豊かさも保証されていたのであろう。

池はいわゆる「心」という字の形をした心谷池で、山麓の赤岩・青岩を背景に掘られており、周囲に各種の樹木を植える構成となっていて、侘び寂を基調とした中世様式と言われている。

さて、小池氏館跡は現在館跡の南側に間門三間半、奥戸二間の門構えと、この池を中心とした庭園、及び土塁が残されているのみで(第44回参照)、館全体の構成を明らかにし得ない。

土塁は、先にも詳しく述べたが、北東の山際に長方形の土塁を明らかにし得たが、「菅野阿誌」の調べによると、その概略図には長方形土塁から続く西方向へと伸びる土塁が記されている。この土塁の中間部分が途切れていて、裏門の可能性が示唆されている。裏門の延長方向の山際に、貯水施設と推定した長方形土塁が存在していることとなり、館の構成上不可解な施設と云わざるを得ない。しかし、今回の調査が始まった段階では、長方形以外の土塁は既に崩されていた。

しかし、この土塁から池までの構造的な連続性を考慮すると、先に推測した様な関連性が妥当性を帯びてくる。従って、現時点では、長方形土塁が館建設時に存在していたかは不明であるが、少なくとも何回か池が改修された際に、その利水施設の一部として建設された可能性が高いことを指摘しておきたい。

また、出土遺物が18世紀末から19世紀初頭にかけての纏まりを示しており、19世紀前半に編纂された「新編武蔵風土記稿」との時代性が合致するため、この時期以前に、池を含めた庭園と長方形土塁を取り巻く利水施設が既に完成していたと理解しておきたい。

また、伝承によると、座敷にいて泳ぐ鯉が見えたといわれており、門を入り、山際の奥まった池の近くに書院が造られていたのだろう。四季折々の背景と融合した庭園に佇み、風景を愛でる様子が浮かんで来るなど、想像を逞くさせられるのである。

引用参考文献

『新編武蔵風土記稿』巻之二百五十二 秩父郡之七

井沢隆夫 1992 「東京都新宿区内藤町遺跡」新宿区内藤町遺跡調査会

江戸陶磁土器研究グループ 1992 「シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題」Ⅰ資料集・発表要旨

金子直行 1989 「下段遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第87集

菊地伸之 1992 「秩父・一貫日遺跡 '91」皆野町教育委員会

菊地伸之 1993 「秩父・オリョウガイド遺跡 '91 秩父・小池遺跡 '92」皆野町教育委員会

菊地伸之 1993 「秩父・柳瀬古墳群第1号墳 '91」皆野町教育委員会

菊地伸之 1995 「秩父・下原遺跡 '93」皆野町教育委員会

菊地伸之 1996 「秩父・親佛遺跡 '94 秩父・小池遺跡 '95」皆野町教育委員会

菊地伸之 1996 「秩父・一貫日遺跡 '94 秩父・大洲古墳 '94」皆野町教育委員会

菊地伸之 1997 「秩父・親扇遺跡 '96」皆野町教育委員会

菊地伸之 1998 「秩父・神平遺跡 '96 秩父・辻平遺跡 '96」皆野町教育委員会

菊地伸之 2000 「秩父・半繩遺跡 '96」皆野町教育委員会

栗島義明 1994 「神庭洞窟」埼玉県立博物館

思坂慎二 1999 「妙音寺ノ妙音寺洞穴」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第209集

小林 茂・古川國男 1964 「秩父・三角穴半洞窟遺跡調査概報」『埼玉考古』第2号

小林 茂 1966 「秩父・彦久保遺跡」古田町教育委員会

小林 茂他 1981 「秩父・駒形遺跡 '78」駒形遺跡発掘調査会

小林 茂他 1988 「秩父・大背戸遺跡 '63」皆野町教育委員会

小林茂・田部井功 1995 「秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書」合角ダム水没地域総合調査会

埼玉県教育委員会 1998 「埼玉の中世城館跡」

田部井 功 1984 「秩父・浦山岩合岩陰遺跡 '82」浦山岩合岩陰遺跡調査会

千嶋寿・加茂下仁 1992 「秩父合角ダム水没地域総合調査報告書 下巻 人文編」

東京大学理学部遺跡調査室 1989 「東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点」東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 1

東京大学遺跡調査室 1990 「東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点」東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3

西井幸雄 1998 「宮地墓地遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第210集

橋本 勉 1999 「戸崎前Ⅱノ塚御堂根Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第218集

伴瀬宗 1998 「要害山城跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第221集

藤沢良祐 1998 「瀬戸市史 陶磁史編六」瀬戸市

皆野町 1988 「皆野町誌」通史編

山口陣志 1998 「籠干綱町遺跡第Ⅳ地点」小田原市文化財調査報告書第67集

写真図版



土壘近景 (南西コーナー付近)



土壘断面



北側土壘の石垣状積石



北側土壘



西側土塁



西側土塁の断面



土塁近景（北東コーナー付近）



調査区外の土塁



12-1



1'



12-2



12-3



12-4



4'



12-6



12-9



12-7



7'



12-8



8'



13-10



10'



13-11



11'



13-16



13-27



13-12



14-29



13-14



13-15



14-28



14-33



14-34



14'



15'



28'



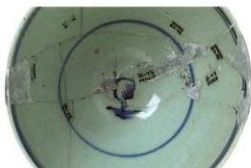
33'



34'



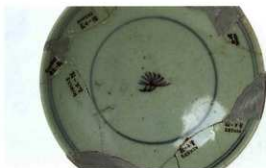
15-35



35'



15-39



39'



15-38



16-46



16-47



16-48



16-44



16-45



15-40



15-41



13-18



13-21



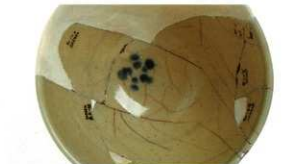
13-22



13-23



14-31



31'



17-52



17-54



16-49



16-50



17-57



17-59

報告書抄録

ふりがな	こいけしやかたあと							
書名	小池氏館跡							
副書名	国道140号線皆野寄居バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	—II—							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第258集							
編著者名	金子直行							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1					TEL0493-39-3955		
発行年月日	西暦2000（平成12）年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こいけしやかたあと 小池氏館跡	さいたまけんちゅうぶ 埼玉県秋父郡 みなのまち 皆野町大字 みなの 皆野145-1	11362	059	36° 03′ 36″	139° 06′ 07″	19981201 ～ 19990228	1670	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小池氏館跡	館跡	中・近世	土塁 1		古銭 近世陶磁器			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第258集

秩父郡皆野町

小池氏館跡

国道140号線皆野寄居バイパス関係
埋蔵文化財発掘調査報告

— II —

平成12年6月26日 印刷

平成12年6月30日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1
電話 0493 (39) 3955

印刷／金井印刷工業株式会社